

# あやめ咲く野の農民詩人

## 1920年代の日本と詩人ミストラル

石塚 出穂

### 序

明治後期に上田敏の『海潮音』によって始められた近代プロヴァンス文学紹介は、その後、上田の友人であった森鷗外らに引き継がれ、大正初期には新たに小品2つが翻訳されるなど、ゆるやかにではあるが着実に発展を続けた<sup>1</sup>。なかでも大正4年(1915年)に考古学者の濱田青陵<sup>はまた せいりょう</sup>が手掛けた「マガリの歌」の翻訳は、英語やドイツ語からの重訳ではなく、プロヴァンス語原文及び仏語訳に基づく最初の邦訳であるという点で、近代南仏文学の日本移入史上、一時代を画する貴重な成果となった。

またこれより1年前の1914年の春、19世紀のプロヴァンスが生んだ最大の詩人フレデリック・ミストラルが世を去ったとき、奄美大島出身の松岡曙村<sup>まつおかしやそん</sup>という人物がその追悼記事を書いているが、この松岡は1906年からの約3年を南仏アヴェロン県に暮らす間に土地の言葉を覚え、いつ知り合ったものか、長年、詩人を親しく「先生」と呼んで慕っていたという。プロヴァンスという土地の名さえ日本ではまだ馴染みの薄かった時代に、ミストラルと個人的な交流を持った日本人が存在したという事実は特筆に値しよう。

初期の近代南仏文学紹介者の多くが海外文献の伝える断片的な情報に頼らざるを得なかったのに対し、濱田青陵や松岡曙村は自らプロヴァンスを訪れ、直にその土地の言語や文化に触れる機会を持った。そのこと自体は、時代が進んで「洋行」が盛んになった結果に違いないが、彼等がその機会を生かして優れた紹介者となりえた要因は、なによりも、そこで出会ったフランス語とは異なる言語を素直な驚きと感動をもって受け入れる柔軟さにあった。

<sup>1</sup> 明治後期から大正初期にかけての近代プロヴァンス文学移入の経過については、以下の2つの拙稿にまとめている。「海のあなたの遙けき南 —上田敏と近代プロヴァンス文学—」、『仏語仏文学研究』第25号、東京大学仏語仏文学研究会、2002年4月、129-148頁；「南仏の星と東方の三博士 —大正初期の日本とプロヴァンス—」、『仏語仏文学研究』第26号、2002年11月、85-106頁。

これには、例えば松岡の場合、自分自身が奄美大島という「平家時代の古語その儘を方言として使つてゐる」土地の出身のため、フランス語よりもラテン語に近い古い形を残したプロヴァンス語を、どこか「懐しく思つた」という事情なども関係しているが<sup>2</sup>、それにしても、新しく知ったものに拒絶反応を示すか、逆に生き生きとした興味を抱くかは、やはり個人の資質によって決まるものであろう。その意味で、濱田や松岡はプロヴァンスという知られざる土地の紹介者となるための資格を十分に備えていたと思われる。

ただ惜しいことに彼等は作家でも専門の文学者でもなく、その得た知識はわずかに追悼記事や紀行文のような短い文章で散発的に発表されるにとどまった。近代南仏文学復興運動がより確かな輪郭を現わし、特にその中心となっていた詩人ミストラルの姿がより鮮明になるのは、1920年代に入り、フランス文学の専門家を含む一群の文学者達によって、様々な角度からのアプローチが試みられるようになってからである。本稿では、濱田による「マガリの歌」の翻訳が世に出た後、大正中期から後期にかけての約10年間に、近代プロヴァンス文学がどのように紹介されたかを見ていくことにする。

## 1

濱田青陵(1881-1938)が3年間の留学を終えて帰国してから間もない1916年の7月、上田敏が42歳の若さでその生涯を閉じた。

上田は濱田にとって東京大学での先輩にあたり、また京都大学における同僚でもあったので、濱田は「故博士の追憶<sup>3</sup>」と題する文章を綴って彼の死を悼んだ。そこには、留学中にギリシャやイタリアを旅した際の思い出とからめて、ギリシャ語を上田のお下がりの教科書で学んだこと、ダンテの墓に詣でた折に上田の著書『詩聖ダンテ』を思い出したことなどが語られているが、プロヴァンスや『海潮音』への言及はなく、濱田が1915年に手掛けた「マガリの歌」の翻訳が、上田の訳業を念頭に置いてなされたものかどうかは確かめることができない。

この後の数年間は、第一次大戦の影響もあつてか、プロヴァンス文学紹介の動きは特に見られないが、終戦の翌年の1919年になると、鷗外訳の「ナル

<sup>2</sup> 松岡曙村「巴里へ三度 佛國田園詩人逝く」、『東京朝日新聞』、大正3年5月7日、第6面。

<sup>3</sup> 青陵生「故博士の追憶」、『藝文』(京都帝国大学文科大学内 京都文学会)、第7年第9号、大正5年9月、54-56頁。

ボンヌの蛙」が翻訳短編集『蛙』の巻頭を飾ったほか、「郷土詩人ミストラル」の一節を含む濱田の『南歐遊記』が出版され、また上田敏訳の「故國」（『海潮音』所収）が生田春月編の『泰西名詩名譯集』に収録されるなど、過去の複数の翻訳・紹介が形を変えて世に出た。なお、この年にはドーデの回想録『巴里の三十年』も翻訳・出版されているが、残念ながらこれは部分訳で、ミストラルらフェリブリージュの詩人達との交友を綴った「風車小屋便りの来歴」の章は訳出されていない<sup>4</sup>。

さて、次に近代プロヴァンス文学関連の文章が発表されるのは 1921 年の初頭である。雑誌『新文学』の新年特別号に掲載された「フランス文藝印象記（三）—ミストラルの家—」（以下、「ミストラルの家」と略記）という文章がそれで、筆者は仏文学者の吉江喬松（号、孤雁。1880-1940）である。これは副題が示す通り、吉江がフランス留学中の 1918 年に、マイヤーヌという小さな村、ミストラルが生れてその生涯のほとんどを過ごした村に、詩人の家を訪ねた日の回想を記したものである。

吉江は 1916 年 11 月に渡仏したが、折悪しく第一次大戦の最中で一般の船舶は地中海を通航できず、イギリスを経由してルアーヴルに上陸するなど、最初から戦争の影響を大きく受けた留学生活を送ることになった。パリ到着後、ソルボンヌ大学に籍を置いて研究に専念していた吉江が、1918 年の春にプロヴァンスへと向かったのも、パリへの爆撃がいよいよ激しさを増して、少しでも安全な「南方」に避難せざるを得なくなったためであった。

カンヌに近いアンティーブ岬にある友人の別荘に身を寄せた吉江は、久しぶりに平穏な日々を送り、別荘に集まった友人達との交流を楽しんだが、それと同時に南フランスの自然の美しさにも開眼した。吉江は若い頃、自然詩人としても知られた人であり、その彼が戦時下の苦しい生活の中で不意に見出した南仏の明るい太陽に強い印象を受けないはずがなかった。彼は後に、その印象を次のように記している。

佛蘭西の南國の明るさは、熱帶地に見るやうな目くるめく明るさではない。地に沁みいるやうな、草の葉先きにもつれるやうな、そして大氣の中にリズムを立てゝあるやうな、なごやかな明るさである<sup>5</sup>。

やわらかな陽光の描写には、戦乱の中で避難所を見出した者の安堵の思い

<sup>4</sup> アルフォンス・ドーデ著、後藤末雄訳『巴里の三十年』、新潮社、1919 年。

<sup>5</sup> 吉江孤雁「フランス文藝印象記（三） ミストラルの家」、『新文学』第 16 巻第 1 号、大正 10 年 1 月、374-378 頁。後に『佛蘭西印象記』（精華書院、1921 年）に収録。

が重なっているのだろう。しかし、自然詩人として異国の春をいとおしむ一方で、学者としての吉江は、この明るい光が育んだ文学に目を向けることを忘れなかった。アンティープに数週間を過ごした後、彼は友人の一人と旅に出る。そしてその旅の一日、アルルでミストラルの創設したミュゼオン・アルラテン（アルル民俗博物館）を見学したことをきっかけに、マイヤーヌのミストラルの家を訪ねようと思い立ったのである。

ミストラルはすでに4年前に世を去っていたが、幸い彼の夫人マリーはまだ60歳を過ぎたばかりで健在であった。彼女は2人の日本人を快く家に招き入れると、亡き詩人の思い出を語って聞かせたり、また詩人の生前そのままに保たれた書斎を見せたりして親切にもてなし、別れ際には、日本から来たという植物の一枝を記念にと贈ってもくれた。夫人の歓待に心なごんだ吉江達は、「私達のペルリナジュの目的が遺憾なく果たされた」と満足して、マイヤーヌを後にしたのであった。

吉江が帰国後、この日の思い出をまとめたのが「ミストラルの家」であるが、ここには訪問当日の記録に加えて、南仏文学復興運動に関する知識が多く盛り込まれている。そして注目すべきは、吉江がこの復興運動の構成員や成立の経緯を伝えるだけでなく、言語・文学の復興を通じて民族の魂の復権を目指す運動の理想を正しく指摘し、ミストラルをその精神的指導者と捉えていることである。少し長くなるが、その件を引用してみよう。

千八百五十四年に、ミストラルを始めとして七人の詩人等が起した、所謂 *Félibres* の運動は、南國の美を有ゆる方面に於て復興せしめようとしたのであった。言語に、傳説に、教宗に、歴史に、南國獨特の美の發揚、それが彼等の目的であつた。ミストラルは詩人として、南國の傳説に生命を與へ、語學者として北方語よりは更にソノオルな、更にシャンタンなプロヴァンサルの特徴特美を發現し、更に誇る可き南國人固有の精神をかき立て、こゝに「南國復活」の指導者として終始した。彼の講演は燃立つやうな力で聴者を酔はしめ、彼の詩は、日光の豊かな郷土の胸に長く眠つてゐた人々の魂を目醒ましめた。今日、アルルあたりでミストラルを語るのに、全く南方の救主の如くいふのも無理のないことである。南方人は、彼の中に、南國そのものを見出したのである。自分等の魂の活動そのものを見出したのである<sup>6</sup>。

事実、ミストラルを中心とする南仏文学復興運動は、文学の再興のみを目的とするものではなく、トルバドゥールの伝統を持つプロヴァンス語を再び

---

<sup>6</sup> 吉江「ミストラルの家」、376頁。

栄えある文学言語として復活させ、それを通じてプロヴァンスを単なるフランスの一地方ではない、固有の文化を有する独立した民族の土地として認めさせることをも目指していた。この南仏文学復興運動の精神に注目し、その内容にふさわしい力強い熱のこもった文章で日本に伝えたのは吉江が最初であった。

ところで、このような思想は吉江にとって以前から馴染み深いものだった。彼は留学前から、例えばケルトの文芸復興などに関心を寄せ、そこに文学復興を通じた民族精神復権の試みを認めていた。1914年8月に発表した「自然の藝術<sup>7</sup>」と題する評論では、当今のアイランドの詩人達が古伝説に取材する傾向があるのは「要するに『自然に歸る』内的要求」であり、個人が自然な生活に帰るとき、そこに祖先から伝わる固有の精神「レエシアル、マインド」が自ずと浮かび上がってくるはずだ、と説いている。「自然の芸術」の「自然」は、山川草木の自然界と同時に「人間の本性」をも指し、そこに回帰しようとする文学運動に吉江は共感しているのである。

「ミストラルの家」に見られる南仏文学復興運動への理解は、明らかにこの「自然の藝術」論の延長線上にある。吉江はミストラルの像に「田舎者の持つやうな自然性」を見て、「自然がいつも育てゝゆく若々しさと、そして一種の、大木に向ふ時にも持つやうな、おごそかな感じ」を受ける。彼の代表作『ミレイユ』については、それがそっくり土地の伝説であるかのように、「南國の草原のなかに、ロオヌの河岸に、<sup>むかし</sup>舊時から長くはぐくまれてゐた」ものだと述べる。南仏の自然から生まれ出た詩人にして、その土地に保たれてきた民族精神の歌い手。これが吉江の捉えたミストラル像であり、それが留学前から抱いていた芸術家の一つの理想像に合致していたがゆえに、彼はこのプロヴァンス語詩人を紹介する筆を執ったのであった。

「ミストラルの家」は、1921年1月に発表された後、同年8月出版の『佛蘭西印象記』に、ミストラルの肖像を添えて収められたが、吉江は更に翌1922年の3月、今度は「南國<sup>8</sup>」と題する文章で再びミストラルに言及している。ここでも彼は、この南國の詩人がプロヴァンス語で詩を作ったとき、そこに表れ出たのは「南國の土壤の中に眠つてゐた人々の靈」であった、と記して、ミストラルは単に文学作品を創出したのではなく、南仏の人々の魂に形を与えたのだと強調しているが、この記述もまた、書き手が共感を寄せる対象が

<sup>7</sup> 吉江孤雁「自然の藝術」、『早稲田文學』第105号、大正3年8月、2-16頁。

<sup>8</sup> 吉江喬松「佛蘭西文藝印象記（一）南國」、『新潮』第36巻第3号、大正11年3月、2-14頁。後に『佛蘭西文藝印象記』（新潮社、1923年）に収録。

土地に根付いた文学一般であることを示している。

このように、地域主義的な文学運動に少なからぬ関心を抱いていた吉江ではあったが、彼はこの時、自発的にミストラルの家を訪ねたのではなかった。マイヤーヌ行きを提案したのは、彼が「O 君」と呼ぶ同行の友人であった。そしてこの「O 君」は、「私達より以前に、この家を訪ねて来た人は松岡氏であつた」と吉江に教えていることから分かる通り、ミストラルの追悼記事を書いた松岡曙村を知る人物であつて、結果的には彼が松岡と吉江との間の橋渡しをしたことになるのである。

その意味で「O 君」は、日本における近代南仏文学紹介の陰の功労者とも言えるのだが、「ミストラルの家」をよく読んでみると、この日、面会を果たしたミストラル夫人マリーに熱心に質問をしているのは、吉江よりもこの友人「O 君」の方だということが分かる。例えば、真つ先に通された部屋で、詩人が 20 年以上の歳月を費やして完成させたプロヴァンス語＝フランス語辞典『フェリブリージュ宝典 *Tresor dóu Felibrige*』を見たとき、すぐにそれを話題にするのは「O 君」であるし、また『『ミレイユ』のオリジイヌは何であつたらうかと尋ねた』のも「O 君」であつたとされている。

プロヴァンス語の辞書への注目や、『ミレイユ』の由来に寄せる関心など、この人物が示す興味は文学の素人のものとは到底思われぬが、それではこの「O 君」とはいったい何者なのか。吉江の文章ではその正体は明らかにされていないが、幸い「O 君」自身がやはり後にこの日の思い出を随筆に残しており、自分こそが吉江のマイヤーヌ訪問の道連れであつたと証言してくれているので、その一節を示そう。

私たち、吉江喬松先生と私はこの古びた町 [=アルル] を足場に、地方文学の草分けで「ミレイユ」の詩人ミストラルの住んでいた家を訪ねたのであつた。

[中略] ミストラル未亡人はまだ健在であつた。東洋の果てからやって来た行脚たちを心からもてなしてくれた。家の隅々を見せ、生前の詩豪を語り、帰りがけに庭に咲いていた白い花を胸につけてくれた。小さな可憐な花だった。ネームとか呼ぶ日本から到来した花だそうで、ミストラルが取りわけ愛好していたという。「亡き先生と引合はわしてくれたのもこの花、ふるさとを共にした花にも望郷の心根があるものではないか。」ミストラル夫人のささやきが、しんみりと耳の底にのこった<sup>9</sup>。

この文章の書き手は、仏文学者の小牧<sup>こまき</sup>近江<sup>おうみ</sup> (本名、近江谷<sup>おうみや</sup> 駒<sup>こまき</sup>。1894-1978)。

<sup>9</sup> 小牧近江「夏の旅」、『種蒔くひとびと』、かまくら春秋社、1978 年、188-189 頁。

「O 君」は「近江谷君」のイニシャルを示していたのである。フランスから帰国した後、雑誌『種蒔く人』の創刊者として知られるようになる小牧だが、当時は大使館で働きつつソルボンヌに通い、法学部に籍を置きながら文学部の講義を熱心に聴講する学生であった。同じソルボンヌに登録していた吉江とは教室で肩を並べることもあり、大学の外でもかなり親しく交際していたらしい。「ミストラルの家」はそうした2人の交流の一端を書き留めた記録でもあったのである。

タネマキスト・小牧が、ミストラルと交流を持っていた松岡曙村の知合いで、自分自身、若き日にミストラルの家を訪ねていたというのは、それだけでもなかなか楽しいエピソードである<sup>10</sup>。しかし小牧は、滞仏中に吉江をマイヤーヌへと導いたほかにも、近代南仏文学紹介に更に一役買っている。それは帰国後の1922年に、吉江と共に「シャルル・ルイ・フィリップ十三周忌記念講演会」（フィリップ講演会）を企画したことによってである。

小牧はソルボンヌ在学中からフィリップ（1874-1909）の作品を愛読しており、帰国の約1年後の1921年初頭、『種蒔く人』の創刊とほぼ同時に、「シャルル・ルイ・フィリップに就いて」と題する文章を発表し、また後には翻訳も手掛けるなどして熱心にその紹介を行った。これにはその頃小牧がフィリップを「社会主義作家」と見なしていたことも関係しているようだが、「フィリップ講演会」の開催にあたっては、小牧はそのような見方を前面に出すことはせず、むしろ中部フランスという「地方出身の作家」、そして「土に親しむ作家」であることを強調した。一方、吉江もこのとき「大地の声」と題する講演を行い、長い間自己表白の手段を持たなかった農民の代弁者としてフィリップを位置づけた。

当時（1920年代初頭）の日本社会は、第一次大戦後に進行した経済不況や農村窮乏化の中、大正デモクラシーの昂揚で大きく揺れ動いていた。そのような時期に行われた「フィリップ講演会」は、都会偏重の文化を反省して農村に目を向け始めていた文学者達に大きな刺激を与えたのである。講演会の後、数人の作家・評論家が吉江を囲んで「農民文芸研究会」という勉強会を

<sup>10</sup> 松岡の名は小牧の「夏の旅」には見られず、吉江の「ミストラルの家」にも単に「松岡氏」としか記されていないが、1918年以前にマイヤーヌを訪れ、更に1910年以来パリで暮らしていた小牧と接点のある「松岡氏」が複数いるとは考え難いので、これは「松岡曙村」のことと断定してよいであろう。「松岡曙村」は1906年から3年間を南仏で過ごした後、パリに出て1914年まで滞在し、時には日本大使館の依頼で通訳なども務めていたが、おそらくこのパリ時代に小牧と知合ったのであろう。ちなみに小牧は1913年から1917年まで日本大使館で書生として働いていた。

作り、月一回の会合を開いて、まず西洋の農民文学の研究を開始する。この集まりは、翌 1923 年の関東大震災で一旦は中断されたものの、1924 年の春には「農民文芸会」として再出発する。そして、この会の活動の中で、吉江によるミストラル紹介が、更なる進展を見せることになるのである。

そもそも「農民文芸会」は、フィリップ講演会を契機に結成されたものとあって、少なくとも一時期は、ヨーロッパの農民文学に関する研究が活動の主な部分を占めていた。それも、指導的立場にあるのが仏文学の専門家である吉江喬松であったから、勢いフランスの農民文学や地方文学が中心となった。このような流れの中で、すでに吉江の文章によって紹介されていたミストラルも、プロヴァンスという地方出身の作家、農村生活を歌った詩人として、改めて研究対象となったのである。

1926 年、会の中心的存在であった作家の<sup>いたた しげ</sup>犬田 卯（1891-1957）らによって『農民文藝の研究』という書物が出版されるが、この書を構成する 14 章のうちの 1 章（第 12 章）が、「野の詩人ミストラル」の題の下、このプロヴァンス語詩人の紹介にあてられている。ただし記述の大半は、ミストラルを最初にパリの読書界に紹介したラマルティエヌの「文学講話」第 40 話の引用で、地方の一詩人に過ぎなかったミストラルが中央文壇に認められるまでの経緯をたどることに費やされており、合間に挟み込まれた犬田による解説も、吉江の紹介を発展させたものというよりは、あくまでもそれに倣ったものという印象が強い。例えば、土地固有の言語による表現の重要性を語った次のような件。

ミストラルは彼の生地の俗語でしか詩を書かなかつた。巴里の言葉なんか片隅の方に縮こまつて居るがいに。南國の自然、南國の生活——「輝かしい空と、蒼ぐろい橄欖の林と、砂塵の立つ眞白な路と、麥の穂波の風にゆるゝのと、牧場の青草に眞赤なコクリコの果てしなく交りつゞいてゐるのと、その中にローマ人の古蹟が、凱旋門が、古水道が、圓形劇場が、到るところに散在して、若い自然と、舊い人間の文明とを織り出してゐる南國の光景」——（吉江喬松氏佛蘭西文藝印象記より）は南國の言葉によつてしか適切な表現を見出すことが出来ない。これがミストラルの信念であつたのだ<sup>11</sup>。

せっかく仏文学の専門家の文章を引用していながら、ミストラルの作品や

<sup>11</sup> 犬田卯「野の詩人ミストラル」、犬田卯・加藤武雄共著『農民文藝の研究』（農民文藝叢書第二編）、春陽堂、1926 年、129 頁。この本は第一章のみが加藤の担当で、第二章以下はすべて犬田の筆に成る。なお、文中で引用されている南仏の風景描写は、吉江『佛蘭西文藝印象記』の巻頭に置かれた「南國」の冒頭の一節である。



思想についての記述ではなく、単に南仏の風景を借りるにとどまっている。このことから分かるように、相当量の知識に裏打ちされた「ミストラルの家」に比べると、犬田の「野の詩人」は近代南仏文学そのものの紹介としては今一つ物足りない。しかし、それではこの新たなミストラル紹介の試みには価値がないのかといえそうではなく、そこには吉江の文章とはまた違った特色と意義とが認められるのである。

「野の詩人」全体をよく読んでみると分かることだが、犬田はミストラルの提起した問題を、日本文学の現状にも通じる普遍的な問題として理解している。文学を語ると同時に、その背景にある社会に視線を据えているのである。「巴里の言葉なんか片隅の方に縮こまって居るがいい」と書きながら、彼はフランスの首都と同時に日本の首都をも念頭に置いている。このように中央と地方、都会の文学と地方の文学をはっきりと対立させ、それを自らの問題として解決を目指そうとする闘争的な姿勢は、吉江の「ミストラルの家」には見られなかったものである。

もっとも犬田が目標としていたのは農民を描く文学ではなく農民自身の手になる文学で、その意味では生涯を文学のみに捧げたミストラルは彼の「農民文学者」の定義からは外れていた。しかし、ラマルティエヌの「文学講話」をほとんど唯一の情報源としていた犬田は、たぶんに脚色を含んだ「講話」の記述をそのまま受取って、ミストラルを本物の農民だと思っていたのだらう<sup>12</sup>。だからこそ、彼は章の末尾で、プロヴァンス語詩人の名を引き合いに出しつつ、次のように主張しているのである。

中部フランスから此のミストラルの郷國南方へかけて、随分ミストラルのやうな郷土詩人、農民詩人が輩出してゐる。「郷土詩人抄」を見ると百人近くもその名が挙げられてゐる。私はミストラルを思ひ、その他の郷土詩人達、農民詩人達を考へる時、何時も我國にさうした人達のないことを寂しく思ふ。随分多くの詩人達が日本にも生れたのであらう。現在また生れてゐるであらう。が、我國では周圍がそれらの人達をはぐくむ代りに殺してゐるのだ。殺すことを以て本當のやうに考へてゐるのだ。

農村に蕩擻してゐる幾多の青年詩人達よ。私達は力を合はせてさうした周圍の毒を破らうではないか<sup>13</sup>。

<sup>12</sup> ミストラルの父は地主であったが、ミストラル自身は農業に従事したことはなかった。しかしラマルティエヌは「講話」でミストラルを農民として描き、それがパリの文学者達の興味を引く大きな要因になったとも言われている。

<sup>13</sup> 犬田「野の詩人ミストラル」、前掲書、133頁。文中で言及されている「郷土詩人抄」

犬田は第 14 章「土の文藝研究手引」の中でも、今一度ミストラルに言及し、自分の生まれ故郷の言葉でしか詩を書かなかったこの詩人がフランスでは立派に認められ、死後 10 年を過ぎても生地マイヤーヌには崇拜者が巡礼に訪れていると報告している<sup>14</sup>。地方文化が認められる国で、のびのびと自己を表現して評価を得た農民詩人。当時の犬田は近い将来日本にも現れてくるであろう農民詩人のあるべき姿を、はるかな土地プロヴァンスに君臨した詩人の中に見出そうとしていたようである。

吉江番松と小牧近江のマイヤーヌ巡礼から 8 年、南仏文学復興運動の詩人ミストラルは、大正期農民文学運動の流れの中で、最も成功したフランス地方詩人の一人として研究の対象とされるまでになった。ミストラルは 1859 年、『ミレイユ』の冒頭で、「私達は君達のためにこそ歌うのだ、おお牧人達よ、農人達よ！」とプロヴァンスの人々に呼びかけていたが、その声が 60 年の歳月を経て、やや変形されながら、大正末期日本の文学運動の一流派によって受止められたのだと言うこともできるかもしれない。この時期、ミストラルには「百姓詩人」あるいは「野の詩人」などといった肩書が付されているが、これは当時の紹介者達の関心の所在をはっきりと示した呼称だったのである。

## 2

1916 年に渡仏した吉江番松が、1918 年の春の一日マイヤーヌを訪れて「ミストラルの家」という一文を物し、それが大正末期に「農民文芸会」におけるミストラル研究へと至った道筋を前節では紹介してきたが、この会の近代プロヴァンス文学研究は残念ながらその後は発展を見なかった。それには、「農民文芸会」自体がより根本的な問題、農民文芸とはそもそも何かという問いをめぐる論争に巻き込まれていき、いつまでも舶来の文学ばかりに構ってはいられなくなったという事情も関係していた。

しかし同じ頃、この会の同人の一人が、また別の方面から近代プロヴァンス文学の紹介を始めていた。その同人とは、「農民文芸会」の設立当初からのメンバーで、自宅を会合の場所として提供していた椎名其<sup>しいな</sup>二<sup>そのじ</sup> (1887-1962) という人物である。

---

とは、Adolphe van Bever, *Les Poètes du Terroir, du XV<sup>e</sup> siècle au XX<sup>e</sup> siècle*, 4 vol., Paris, Delagrave, s.d. のことと思われる。

<sup>14</sup> 犬田「土の文藝研究手引 付記」、同上、183 頁。

椎名は、吉江と同じ 1916 年にフランスに渡り、1922 年にいったん帰国したものの 1927 年には再び渡仏、後半生のほとんどをフランスで過ごした<sup>15</sup>。そのようなわけで日本での活動はごく限られていたが、1920 年代の数年間には吉江と共に早稲田大学で教鞭を執っていたこともあり、一部の仏文学関係者には忘れがたい印象を残したようだ。教え子の一人である仏文学者の根津憲三は、彼について次のような回想を記している。

先生は『財産論』の著者ブルードンにも精通しておられたが、学校ではモンテーニュやパスカルなど、いわゆるフランスのモラリストに関して、数人の学生に取囲まれて、炉辺談話のような雰囲気、それも秋田弁なまりで話された。時にはフランスの南方を旅行されたときに会った、風土色の濃い南方詩人、ミストラルについて語られたこともある。旅費に窮して、麦畑の塙（<sup>いぼ</sup>麦塚）の藁束を引抜いて、そのあいた孔に、まるで宿借（<sup>やどかり</sup>）のように足の方からもぐり込み、暖をとった話。麦束の醗酵（<sup>ふかし</sup>）のぬくみで、中はぼかぼかしていたそうである。学生たちは先生のこうした気取らない談話に吸い込まれた<sup>16</sup>。

椎名という人は、仏文科の教師としてはなかなか珍しい経歴の持主で、早稲田大学を中退してアメリカに留学し、ここで大学の新聞科を出て、まず新聞記者になっている。しかしその生活に満足できずに農業を始め、やがて第一次大戦下のフランスに渡って地方の農場で働き始める。ちなみにアメリカを出た時にはフランス語は一言も知らず、農場で仕事をしながら仲間に言葉を教わったというからふるっているが、こうした人物であればこそ、大学の教壇に立っても、麦畑に夜を明かした話などを自らの体験として語ることができたのである。「農民文芸会」への参加にも、もとより不思議はない。

それはさておき、ミストラルに関する記述に注目しよう。根津によれば、椎名は南仏を旅行していて、この「風土色の濃い南方詩人」に会ったのだという。詳しい話の内容が記録されていないので、椎名が具体的に何を語ったのかは知る由もないが、「ミストラルの家」を書いた吉江の側に、いま一人、自分自身の見聞に基づいて近代プロヴァンス文学の知識を持つ人物がいて、しかも講義時間内にその文学を話題にしていたというのが事実であれば、この時期の早稲田大学には、ミストラルという詩人について語ることでできる仏文学の専門家が 2 人、肩を並べていたことになる。

<sup>15</sup> 椎名の伝記的事実については、基本的に次の評伝に拠った。蜷川譲『パリに死す ― 評伝・椎名其二―』、藤原書店、1996 年。

<sup>16</sup> 根津憲三「椎名其二先生のこと」、『フランス文学に沿って』、駿河台出版社、1987 年、195 頁。

もともと椎名が渡仏したのは1916年であるから、1914年に没したミストラルに「会う」のは不可能だったはずだが、吉江のようにマイヤーヌを訪ねてミストラル夫人に面会したり、あるいはかつての濱田青陵のように、ミストラルゆかりの地を訪れて詩人の足跡に触れたりした可能性は十分ある。椎名が後に発表した手記<sup>17</sup>の中で、渡仏後かなり早い時点からフランスの地方文学に興味を抱いていたと述べている事実も、この推測を補強すると考えられる。

椎名がフランス到着後、しばらく地方の農場で働いていたことはすでに述べたが、その農場はピレネー山脈に近いフランス南西部、トゥールーズの近郊にあった。南東部のプロヴァンスとはやや離れているとはいえ、椎名は最初から南仏の一角に身を置いたのである。その上、幸運だったのは、彼が身を寄せた農場の所有者の夫人が、国際平和運動を率いた作家ロマン・ロランと親交を結び、また子供のための社会事業にも力を注ぐなど、進歩的で教養豊かな人物であったことで、椎名はこの夫人から地方文学についての手ほどきを受けることができたのである。

椎名の手記によれば、夫人に教えを受けるきっかけとなった出来事は、彼が農作業の合間に本を読んでいたことであった。他の労働者たちが昼寝をしている中で、一人書物を手にしている椎名に目を留めた夫人は、仕事の時間を減らして更に勉強するようにと彼を励まし、書斎を自由に使わせてくれた。そればかりか、夜にはサロンへ呼んで様々な話を聞かせてくれ、そうした折に地方文学も話題になったというのである。

〔夫人は〕ピレネーおろしの寒い夜などは、しばしば私を大きな薪のもえているサロンへ呼んで、雑談の合い間合い間に地方詩人の、時には地方の言葉で書かれた詩などを朗読してくれた。それが私をして野の花のように咲いているフランス郷土詩に興味をもたせ、後年、フランス全国にわたって、地方作家訪問の行脚をさせたのであった<sup>18</sup>。

夫人が読んでくれた「地方の言葉で書かれた詩」が、具体的にはどのような作品だったのかについては、椎名は何も語っていない。ただ、他ならぬ南仏でのことであるから、プロヴァンス語の詩が含まれていた可能性は高いだろう。そして、椎名の行脚の対象となった土地にプロヴァンスが含まれていたことは、同じ手記において椎名自身が明言している。

<sup>17</sup> 椎名其二「自由に焦れて在仏40年」、『中央公論』、昭和33年1月号。

<sup>18</sup> 同上、288頁。

問題はその訪問の時期で、「後年」とは果たして1922年の日本帰国以前かどうかを確かめる必要があるが、一説によれば、椎名は農場主夫人から旅費をもらってプロヴァンスに行ったとされており<sup>19</sup>、この説と、先に引用した根津の回想とを考え合わせると、椎名は帰国前に少なくとも一度はプロヴァンスを訪れていたと推定されるのである。

ところで椎名をプロヴァンスへと引きつけたのは、確かにこの土地に暮らした作家であったが、それはミストラルらフェリブリージュの中心的詩人達ではなく、『昆虫記』の著者として知られる昆虫学者のジャン＝アンリ・ファーブル(1823-1915)であった。椎名はアメリカ滞在中の1915年にファーブルの死を知ったとき、まるで「親父の死でも聞いたかのように感じた<sup>20</sup>」というほど、早い時期からこのフランスの昆虫学者に心を寄せ、その著作に親しんでいた。農作業の合い間に手にして、農場主夫人に声を掛けられるきっかけとなった本も、実は「ファーブルの仏文『昆虫記』」だった。『昆虫記』の著者に会うことはかなわずとも、せめて彼の暮らした土地を見たい。そうした思いから、椎名はプロヴァンスを目指したのである<sup>21</sup>。

渡仏後まもなく地方文学の存在に目を開かれた椎名が、かねてから憧れていたファーブルの土地・プロヴァンスを訪ねたのなら、その土地の生んだ他の作家達に興味を抱くのは自然な成り行きだっただろう。特に1910年代後半は、数年前に世を去ったばかりのミストラルの記憶がいまだそこここに息づいていた時代である。よって、プロヴァンスに足を踏み入れた椎名が、たとえミストラル本人に「会った」ことはなかったにせよ、詩人の存在の大きさを肌で感じるような体験を持ったのは事実だと考えられる。

残念ながら椎名が残した数少ない手記の中には、ミストラルやフェリブリージュに触れたものはほとんど見当たらず、帰国当時、近代南仏文学に関してどれほどの知識を持っていたかは不明である。おそらくは在仏中にある程度の基礎は築かれており、その上に吉江との交流や「農民文芸会」での研究を通じて得た知識が加わったものと思われるが、裏付けとなる資料は今のところ見つかっていない。

<sup>19</sup> 芹沢光治良「パリの日本料理店」、『芹沢光治良選集』第5巻、全国書房、1965年、382-383頁。椎名のプロヴァンス訪問の話は、彼の知人であった著者の芹沢が1951年にパリで再会した椎名から聞いた思い出として記録されている。小説の一節ではあるが、椎名本人からの「聞き書き」の部分なので、資料的価値があると判断した。

<sup>20</sup> 嵯川、前掲書、121頁。椎名より堀井梁歩宛の書簡の一節。

<sup>21</sup> 芹沢、前掲書、383頁。なお、椎名の手記によれば、ファーブルの家を訪ねた折に、息子のポールに会って話を聞いたこともあったそうである。

しかし、1920年代、早稲田大学で講義をしていた頃の椎名と近代プロヴァンス文学との関わりを示す資料ならば、確かに存在する。それはこの時期に彼が翻訳を手掛けた書物、G・V・ルグロによるファールブルの伝記である。椎名は『昆虫記』の最初期の翻訳者の一人であり<sup>22</sup>、またルグロのファールブル伝を初めて訳したのも彼であった。ところでこの伝記、椎名訳によれば『ファールブルの一生 一科学の詩人—<sup>23</sup>』に、ミストラルをはじめとするフェリブリージュの詩人達の名が繰り返し現れているのである。

ほぼ同時代に、同じプロヴァンスに暮らしていたとはいえ、昆虫学者であるファールブルの伝記に、なぜ南仏文学復興運動が関わってくるのかと不思議に思われるかもしれないが、これには2つの理由がある。まず第一に、ファールブルが少なくとも晩年にはフェリブリージュの会員となっており、ミストラルやルマニユと交流を持っていたこと<sup>24</sup>。そして第二には、伝記作者のルグロが、自分の尊敬する昆虫学者がその偉大な業績にも拘らず、いかに不当に無視され冷遇されてきたかを訴えようとして、地味で懐かしい彼の一生を、常に栄光に包まれていたミストラルの生涯と対比させる形で描いていることである。

個人の伝記に別の人物を比較対象として取り込む書き方は、やや風変わりな印象を与えるが、それだけファールブルとミストラルの知名度に顕著な差があったわけであろう<sup>25</sup>。ファールブルの誕生を語る冒頭近い一節には、早くもミストラルの名が現れている。その箇所を椎名訳で示そう。

一八二三年十二月二十日、彼れ [=ファールブル] は上ルウエルグのミロオ市

<sup>22</sup> ちなみに『昆虫記』の最初の翻訳者は無政府主義者の大杉栄(1885-1923)である。その大杉が、叢文閣版『昆虫記』第1巻を訳したところで殺害されたため、椎名が彼の仕事を引き継ぐ形で第2・第3・第4巻を訳出した。なお、第9巻の翻訳者は小牧近江。こうした訳者の顔ぶれを見るだけでも、当時の日本におけるファールブル受容の傾向が読み取れよう。この問題については、奥本大三郎『博物学の巨人 アンリ・ファールブル』、集英社新書、1999年の第1章「無政府主義者とファールブル」が詳しい。

<sup>23</sup> ルグロ著、椎名其二訳『ファールブルの一生 一科学の詩人—』、叢文閣版、初版1925年；普及版1928年。以下、『ファールブルの一生』と記し、引用は1928年版から行う。底本は明記されていないが、G-V. Legros, *La vie de J.-H. Fabre naturaliste*, Paris, Delagrave, 1925と同じ内容のものと考えられるので、原文参照はこの版に拠った。

<sup>24</sup> ファールブルがフェリブリージュに参加した時期や経緯は明らかにされていないが、遅くとも1890年代には、彼がプロヴァンス語で書いた複数の詩がフェリブリージュの機関誌『プロヴァンス年鑑』に掲載されている。またファールブルは1860年代をアヴィニョンで過ごしており、この頃にルマニユと知り合ったと考えられている。

<sup>25</sup> 日本においては事情が逆で、ファールブルの方がミストラルより知名度が高いため、ルグロの著作の邦訳の中には、ミストラルの出てくる箇所を適宜省略したものもある。

から程遠くないヴェザン町の行政区に属する小さい村サン・レオンに生れた。それは甚だ著名な彼れの隣人で、その赫々たる名聲がやがて彼れのそれをも凌ぐミストラルの誕生よりも、七年ばかり前である。

註一 Rouergue 南フランスの、<sup>ル</sup>、今、アヴェロン縣と稱してある地方。(譯者)

註二 Frédéric Mistral 1830-1914. プロヴァンスの有名な郷土詩人。(譯者) <sup>26</sup>

このような調子で、ルグロはことあるごとにファールブルをミストラルと比較し、時にはファールブルに肩入れするあまり、ミストラルを貶めるようなことまで書いている。例えば、専門の昆虫学以外にも文学や音楽、その他様々なものに興味を持ったファールブルの博識を強調するためには、「詩と云ふ排他的な領域に於てこそ無比」ではあっても科学や音楽を知らないミストラルに比べ、ファールブルの方がどれほど優れているか — 「何んたる優越さであるか！」 — と、あらずもがなの評を差し挟むといった具合である<sup>27</sup>。

ミストラルがファールブルの生活に直接関わってくる時期になると多少は風向きが変わり、ファールブルの家を訪ねたミストラルが彼の生活の苦しさを知って知事に働きかけ、年金を受けられるように計らったことなど、詩人の思いやりある一面も書き留められるようになる。ただし、ルグロはここでも、ミストラルのファールブル訪問の目的は、老昆虫学者が大切に描きためたキノコの水彩画を買い取ってミュゼオン・アルラテンを飾ることにあったのだと、あくまでも批判的な視線を詩人に向けている。

しかしその一方で、ルグロはプロヴァンス語に対しては惜しめない讃辞をおくっている。それはファールブルがこの言葉を愛し、『昆虫記』にも地方独特の昆虫の呼び名やその他の表現を取り入れ、ついには自らプロヴァンス語で詩作を行うまでになっていたためである。伝記作者の記録を信ずるならば、ファールブルは、フェリブリージュの主導者の一人で、諧謔的なコントを得意としたジョゼフ・ルマニエ (1818-1891) の作品を特に好んでいたという。椎名訳から該当箇所を引こう。

プロヴァンス言葉、此の華かな方言、意味が豊富で響がよく、そして非常に暗示的な上に甚だ色彩に富み、云はんとする所を的確に云ふ點では屢々フランス語も及ばない程な此の素晴らしい言葉を、彼れがあんなにも愛したのは矢張りさうした理由によるものである。當時唱道され出した OC 語 (ロワール地方の方言) の特徴を保存しようと云ふ運動に注意を拂つたファールブルは、特にルマニエ

<sup>26</sup> 『ファールブルの一生』、3-4 頁。

<sup>27</sup> 同上、400 頁。

ユの作品を読んで此の方言を學んだ。此の作家の親しみのあるお構ひなしの文體が、ミストラルの堂々たる云ひ方よりは、寧ろ彼れに適するのであつた<sup>28</sup>。

訳文中の「OC 語の特徴を保存しようと云ふ運動」とは、原文のいわゆる「フェリーブルの運動 *mouvement félibréen*」、すなわちフェリブリージュの詩人達による南仏語南仏文学復興運動のことである。「フェリーブル」を直訳しても意味が通じないと考えた椎名が、復興運動の具体的な内容を説明する工夫をしたのであろう。なお、「ロワール地方の方言」という注にはいささか首を傾げさせられるが、これは「ロワール河以南」ほどの意味ではないかと推測される<sup>29</sup>。

以上、ルグロの著作についてかなり詳しく紹介してきたが、話を椎名本人に戻すと、彼は 1920 年代、一連のファーブル翻訳に非常な情熱を傾け、この仕事に専念するために教職を辞そうと考えたことさえあったという<sup>30</sup>。その翻訳の中には、無論ルグロによる伝記も含まれていたから、この頃、椎名はたびたびミストラルの名を目にし、また「フェリーブル」「フェリブリージュ」といった分かりにくい語をどう訳すべきかと頭を悩ませていたことになる。椎名訳『ファブルの一生』が出版されたのは 1925 年だが、この前後の数年間に椎名が教室でミストラルの話をしていたとすれば、ファーブル翻訳がその一つの契機であったことは間違いない。

また同じ頃、「農民文芸会」でミストラルが研究対象となっていたことも無関係ではなかろう。「農民」「百姓」という肩書は、椎名がファーブルに興味を寄せた理由の一つであり、それは『ファブルの一生』の「譯者序」で椎名がファーブルを「百姓の子として生まれ、生涯百姓を以つて終始した科學者」で「實に平民の典型である、魂である」と評していることから分かるが、同じプロヴァンスに暮らした「農民詩人」ミストラルにも、椎名は「百姓學者」に対するのと同様の関心を抱いたに違いない。ルグロのファーブル伝が、ミストラルをファーブルと並ぶプロヴァンスの「偉大な百姓」と呼んでいるのだから、なおさらである。

<sup>28</sup> 同上、320-321 頁。ルマニューについては、「*Josephe[sic] Roumanille, 1818-1891*。プロヴァンスの詩人。OC 語復興運動主唱者の一人。」という注が付けられている。なお、「屢々フランス語も及ばないほど」という部分は、正しくは「プロヴァンス語の表現には、それに相当する表現がフランス語にないものも多い」の意である。

<sup>29</sup> ちなみに、1921 年出版の『模範佛和大辭典』の改版復興版（白水社、1950 年）の *félibre* の項にも「oc 語（佛蘭西 Loire 地方の古語）の地方的特色を保存使用することを主張する文學の一派に屬する作家（*Roumanille, Mistral* の如き）」とある（下線部筆者）。

<sup>30</sup> 蜷川、前掲書、201 頁。



…二三里離れた他の村では、もう一人の偉大な百姓、プロヴァンスの歌人、愛と悦びと、野の労働と古への信仰との詩人——ミストラルが讃辭と崇拜との中で彼れの素晴らしい生存の、類ひなき経過を辿つてゐた。[中略]彼れも亦本質に於て素朴な人だつた。そしてファブルと同じやうに——此の偉大な博物學者がその郷土の蟬の歌、埃だらけな橄欖樹などから離れることの出来なかつたやうに、ミストラルもその郷土から去ることが出来なかつた。そして彼れも亦都會から遠く、靜かな村の中で、同じ平野の地平線と百里香の薰る岡とを友として、矢張り小さい家の中で單純な、叡智に充ちた生活をしてゐた<sup>31</sup>。

「ファブルと同じやうに」素朴な「野の労働と古への信仰との詩人」——これはルグロの言葉であるが、おそらくは椎名もこのようなミストラル像を描き、同様の言葉でミストラルを語っていたのではないだろうか。

椎名の訳したファブル伝は、ミストラルやフェリブリージュを紹介するための著作ではなく、その意味ではこの翻訳を吉江や犬田による紹介と同列に置くことができないのは確かである。しかしルグロの伝記が、ミストラルに関する記述の正当性に問題はあるものの、曲がりなりにもこのプロヴァンス語詩人の名を日本の読書界に伝え続けたという点で、近代プロヴァンス文学紹介の一端を担ってきた書物であるのもまた事実である。そうとすれば、その最初の翻訳者である椎名も、この文学の移入史上、やはり逸することのできない重要な人物と評価されるべきであろう。

### 3

1916年に相前後してフランスへ渡り、日本帰国後は共に「農民文芸会」のメンバーとなった吉江喬松と椎名其二の2人によって、近代プロヴァンス文学の紹介が行われるようになった経過を上では見てきた。しかし、吉江が南仏文学復興運動の理念を、椎名はファブルと同郷の詩人としてのミストラルの姿を、それぞれ伝えたとはいえ、彼等はフェリブリージュが生み出した文学作品そのものを翻訳・紹介することはほとんどなかった<sup>32</sup>。彼等の代わりにその役目を引き受け、濱田青陵に続く第四の近代プロヴァンス文学翻訳者となったのは、作家の水野葉舟<sup>みづの ようしゅう</sup>（1883-1947）であった。

水野は若くして与謝野寛の新詩社に参加し、そのまま文学の道に進んだが、

<sup>31</sup> 『ファブルの一生』、436-437頁。

<sup>32</sup> ただし、吉江「ミストラルの家」と椎名訳『ファブルの一生』には、それぞれ数行ずつミストラルの詩句の引用（プロヴァンス語原文）及びその翻訳が含まれている。

創作活動を続ける一方で、民話や怪談を収集したり、エスペラントやローマ字文学の普及を図ったりと、様々な分野に幅広く関心を持った。余談だが、『遠野物語』の語り手を柳田国男に紹介したのも水野であった。その彼が、大正時代には自分の子供達の教育のために児童文学の筆を執り、また各国の教科書の翻訳を行うようになったのだが、このとき、フランスの教科書に収録されていたミストラルの小品3編が、仏語訳から重訳されたのである。

その最初の1編「思ひ出」が発表されたのは、1921年の10月出版の『佛國小學讀本』上巻においてである<sup>33</sup>。この年の1月には吉江の「ミストラルの家」が雑誌『新文學』に掲載され、8月には『佛蘭西印象記』に収録されたことはすでに見た通りであるが、その頃ちょうど翻訳の仕事に取り組んでいた水野が、テキスト選択の参考にしたかどうかはともかく、吉江の文章でミストラルの名を目にしていた可能性は高い。というのも、水野は学生時代に吉江と共同生活をしていたほど親しく、自然詩人としての吉江とは文学上の友人でもあったからである。もっとも吉江が研究者となった頃にはやや疎遠になっていたらしいが、それでも旧友の仕事にはやはりある程度の関心は抱き続けていたに違いない。

さて、「思ひ出」に話を戻すと、これはミストラルの自伝的作品『私の生立ち。思い出と物語』（1906年。以下、『思い出』と略記）の第4章「家出」の一部を、「その一 家出」「その二 夢」と2つの部分に分けて訳出したものである<sup>34</sup>。フレデリック少年はある日、学校をずる休みして遊んでいて父親に叱られ、晩にはお仕置きだと申し渡される。父親の鞭が怖くてたまらない少年はそのまま家出を決行するが、一夜の宿を求めたあばら家でジブシーと鉢合わせして樽に押し込まれた上に、狼に襲われるという大変な目に遭い、やっとの思いで家に帰り着く。ところが、彼のこの夜の大冒険を家族は信じてくれず、いくら一所懸命話しても、怖いから夢を見たのだろうと取り合ってくれなかった。これが、「家出」及び「夢」で語られているミストラルの子

<sup>33</sup> 「思ひ出 その一 家出、その二 夢」、水野葉舟・星野辰男共訳『佛國小學讀本』上巻、世界文庫刊行会、1921年、279-295頁。末尾に〔フレデリック＝ミストラル〕と原作者名が記されている他は、出典の表示はなし。共訳者の星野辰男（1892-1968）は初期のルパン翻訳者。この読本には2人の訳者の分担は明記されていないが、ミストラルの「思ひ出」は、後に水野葉舟訳『フランスの読本』（春陽堂、1936年）に収録されているため、ここでも水野訳として扱うことにする。

<sup>34</sup> Frédéric Mistral, « Lou Plantié (L'école buissonnière) », *Moun Espelido. Memòri e raconte* (Mes Origines. Mémoires et récits). 『年鑑』掲載時の題名は「Un Plantié」で、I～IIIの3節に分けられていた。邦訳の「その一」「その二」はこの版のII・IIIにほぼ相当するが、細部に多くの差異が見られるため、『年鑑』が底本でないことは明らかである。

供時代の思い出である<sup>35</sup>。

この翻訳の底本となった教科書は確認されていないものの、物語の内容は現行の『思い出』第4章とほぼ同じで、特に問題とすべき点はない。細かな省略などを除けば、一番大きな差異は『思い出』には見られない「その一」「その二」という区切りがあることだが、これは物語の構成から見て不自然ではないし、1906年、『思い出』の出版に先立って『政治・文学年鑑』という雑誌に連載されたミストラル自身の仏訳版も同じ箇所前半・後半に分けられている<sup>36</sup>。ちなみに、この『政治・文学年鑑』版には、「家出」という章の題に加えて、話の主要要素を列挙した副題が付されており、後半のそれは「ジブシー達。一 狼の樽：夢」となっている。邦訳のもとになったテキストが、雑誌掲載時の副題を採用していた可能性も考えられよう。

これが水野による最初のミストラル作品の翻訳だが、他の2編の翻訳が公にされるのは約2年後の1923年7月、吉江の『佛蘭西文芸印象記』が出版された2ヶ月後である。今回もやはりフランス語教科書所収の仏語版から訳出したもので、『フランス小學讀本』（世界文庫刊行会）という学年別6巻組の読物の4年生及び6年生向けのものに、「太陽をほめる歌」及び「驢馬の首」という作品がそれぞれ収められた。

このうち、4年生用の読本に載った「太陽をほめる歌」は、ミストラルの抒情詩集『黄金の島々 *Lis Isclo d'or*』（1875）の巻頭を飾る詩で、南仏の明るい太陽に捧げられた讃歌である。水野の翻訳の底本は不明だが、読本の訳文を見る限り、現行のテキストと大差はなく、正しくミストラル自身の仏語訳に基づくものと考えられる。ちなみにこの詩の冒頭の一節は、ビゼーが曲を付けて、歌劇『アルルの女』に取り入れられたことでも知られているので、その部分のプロヴァンス語原文と水野訳とを示してみよう。

プロヴァンスのえらい太陽、

ミストラル  
悪風の愉快な教父、

お前は、なみなみとつがれたクローの葡萄酒を

のみほすやうに、

デュランスの河を涸らす。

Grand soulèu de la Prouvènço,

Gai coumpaire dóu mistrau,

Tu qu'escoules la Durènço

Coume un flot de vin de Crau,

お前の金のラムブを輝かせ！

Fai lusi toun blound calèu !

<sup>35</sup> 樽に押し込まれた少年が狼の尻尾をつかんで危地を脱する話は、民話の一類型として知られている。新倉朗子編訳『フランス民話集』、岩波文庫、1993年、308頁。

<sup>36</sup> *Annales politiques et littéraires*, N° 1182 et N° 1182, 11 et 18 février 1906.

くらやみと災難をおっぱらへ！  
いそげ！ いそげ！ いそげ！  
姿を現せ、美しい太陽<sup>37</sup>！

Coucho l'oumbro emai li flèu !  
Lèu ! lèu ! lèu !  
Fai te vèire, bèu soulèu !

訳文2行目の「教父」は *coumpaire* (*compère*) の訳で、ここではむしろ「仲間、相棒」とすべきであろう。しかし、全体としては誤訳も少なく、子供向けの翻訳ながら口調も甘くなり過ぎず、仏語訳からの重訳とはいえ、原作の内容をほぼ忠実に伝える翻訳と評価できる。

ところが、6年生用の読本に収められた「驢馬の首」については、少々事情が異なってくる。この短編は、少年時代の家出を扱った「思ひ出」と同様、ミストラルの自伝的作品『私の生立ち。思い出と物語』から採られた詩人の子供時代の回想なのだが、これが現行の版とかなりの食い違いを見せているのである。まず、『思い出』第一章によって、該当する件を紹介すると、次のようになる。

5、6歳の頃、家の周りを遊び回っていた幼いフレデリックは、水辺に咲くアヤメに心を引かれ、それを摘もうとしては何度も水に落ちた。母に叱られ、泣きながら眠った彼は、夢の中でようやくその花を摘み取ることに成功する。そのとき名を呼ばれて目覚めると、彼が夢にまで見た花が枕元に揺れている。子供があんなにも欲しがっているものだからと、父が自ら花を摘みに行き、母がそれを飾ってくれたのである。子供の一途な花への憧れと、それを見守る両親の愛情とが美しく描き出された、印象深い挿話である。

この物語の大筋は『フランス小學讀本 第六學年』でも保たれているが、細部には数行単位の削除を含めた多くの差異が見られる。最も大きな変化が認められるのは、子供の憧れの対象として作中で大きな役割を果たす花の名である。上に要約した『思い出』第一章では、幼いフレデリックが魅了された花は、ほぼ一貫して「アヤメ」あるいはそれに類する名で呼ばれている<sup>38</sup>。ところが『小學讀本』では、2、3箇所を除いて、後はすべて表題にある「驢馬の首」という表現が、その花の名として使われているのである。この不思議

<sup>37</sup> 水野堯舟纂訳『フランス小學讀本 第四學年』、世界文庫刊行会、1923年、84頁。「悪風」には「フランスの南の地方でふく乾いた寒い風を特別にミストラルといふ。」という解説が括弧入りで添えてある。

<sup>38</sup> プロヴァンス語原文では *glaujo*、仏訳では *glais* あるいは *glaièul* の語が用いられている。これは正確には「キショウブ」を指すようだが、ここでは便宜的に水野訳に使われている「アヤメ」に統一しておく。なお、『思い出』を翻訳した杉富士雄は *glaujo* に「鳶尾（いちばつ）」という訳語をあてている。

議な呼び名の由来は、文中で次のように説明されている。

なぜだかよく知らないけれども、この辺では、このきれいな花を「驢馬の首」と呼んでゐた。それは、おほかたその花が、驢馬と同じやうに、小さい川の岸が好きなせいであらう<sup>39</sup>。

水辺が好きだという共通点から、驢馬とアヤメの花が結びつくと説明されれば、命名の理屈は納得されるが、頻繁に出てくる花の名が「驢馬の首」であるか「アヤメ」であるかが大きく物語の印象を変えるのも確かである。そもそも『思い出』にはないこの呼び名が、なぜ水野訳に現れてくるのか。水野はどのようなテキストを底本としたのだろうか。

「驢馬の首」が収められている『フランス小學讀本』には原典とした教科書に関する注記はなく、個々の読物の末尾に作者名と、場合によってはそれに加えて作品名が簡潔に記されているのみである。しかし「驢馬の首」については、一応底本と考えられるテキストがある。それは A・ミロノーという人物が編んだ『中級讀本選集<sup>40</sup>』（以下、『選集』と略記）である。

このミロノーの『選集』は、初版が何年に出たものかは不明だが、今回参照することのできた 1934 年版の 392 頁から 399 頁に、ミストラルのアヤメの花のエピソードが載っており、その内容はほぼ完全に水野訳「驢馬の首」と一致する。更に、397 頁には、子供が片手で草をつかんで体を支えながら、もう一方の手を水辺の花へと差し伸べている挿絵があるが、この絵がそっくりそのまま『フランス小學讀本』に再録されている。以上の理由から、水野の参照したのは 1923 年以前に出たミロノー選集であることはほぼ確実と考えられる<sup>41</sup>。

ところで、このミロノー選集の 1934 年版を見ると、ミストラルの短編には「アヤメの花 La fleur de glais」という題が付けられており、出典はプロン＝ヌリー社刊の『思い出』だと記されている<sup>42</sup>。しかし、1920 年代前半までに出版されたプロン＝ヌリー版はすべて 1906 年の初版と同一のものとされており、それが事実ならば、そこには「驢馬の首」に類する名は現れていな

<sup>39</sup> 水野葉舟纂訳『フランス小學讀本 第六學年』、世界文庫刊行会、1923 年、7-8 頁。

<sup>40</sup> A. Mironneau, *Choix de lectures*, Cours moyen (C. É. P.). 編者ミロノーは、この種の読本を複数編んでおり、そのうちの一冊 (*L'année Préparatoire de Lecture Courante*) は『佛國小學讀本』の参考図書として、上巻の「例言」に題名が挙げられている。

<sup>41</sup> ただし確証は得られていないので、古い版を調査して結論を出したい。

<sup>42</sup> A. Mironneau, *Choix de lectures*, Cours moyen (C. É. P.), Nouvelle Édition, Paris, Armand Colin, 1934, p. 399.

い<sup>43</sup>。それではミロノーはどこからこのエピソードを引いてきたのだろうか。

この問いには明確な答えは出せないが、一つ言えることは、ミロノー版「アヤメの花」は、『思い出』に収録された現行の版よりも、ミストラルが 1889 年の『プロヴァンス年鑑』に発表したテキストに近いということである。この『年鑑』版はまさに「ロバノクビ Tèsto-d'ase (Têtes-d'âne)」と題されており、文中でも「アヤメ glaujo」という言葉よりこの語のほうが多く用いられている。そして、花の名の由来について説明する件は、ミロノー版よりやや詳しく、次のようなことが記されている。

ただ、マイヤーヌでは、なぜかこの美しい花をロバノクビ tèsto-d'ase と呼んでいた：おそらくそれは、この花がロバのように、水辺を好むためである。民衆の言葉には、こうした風変わりな名前があって、人々は普段、本当の名前よりもそうした名前のほうを、おもしろがってよく用いるのである<sup>44</sup>。

ミロノー版にはなかった最後の一文で、ミストラルは、「ロバノクビ」という名はあくまでも民衆が、「おもしろがって、ふざけて pèr galeja」用いる「風変わりな名前 noum de fantasié」なのだと解説している。無論、ミストラルはこうした呼び名を否定的にとらえてはいるわけではない。それはこの短編の中で、彼がアヤメの花をほぼ一貫して「ロバノクビ」の名で呼んでいることから明らかである。しかし、最終的にこのエピソードを『思い出』に組み入れる際に、彼はこの呼称を捨て、「アヤメの花 flour de glaujo」という名を採用したのである。それはなぜか。

一つ考えられるのは、この「ロバノクビ」という名が、アヤメの花以外にも、ある生き物と呼ぶのに使われていることである。プロヴァンス語の tèsto-d'ase は、オタマジャクシに対しても用いられる。ミストラルの辞書には、この語がオタマジャクシを表す理由は示されていないが、彼の前世代の S・J・オノラの辞書には「体に比して頭が非常に大きいため」だと説明されている<sup>45</sup>。

<sup>43</sup> 畠中敏郎「ミストラルとその『思い出』」、『天理大学学報』第 99 号、1975 年、124-125 頁によれば、ブロン社から出版された『思い出』には、1906 年刊のプロヴァンス語版・フランス語版・対訳版の三種、及び内容は以上の三種と同じ仏語廉価版（刊行年不明）があるという。筆者は今回、1906 年の仏語版と刊行年不明の仏語廉価版一種を確認したが、これらの版では、問題の花の名は「アヤメ」に統一されていた。

<sup>44</sup> *Armana Prouvençau* (Almanach provençal), pèr lou bèl an de Diéu 1889, p. 23-24.

<sup>45</sup> S. J. Honnorat, *Dictionnaire provençal-français*, t. III, Marseille, Laffite Reprints, 1971 (Réimpression de l'édition de Digne, Repos imprimeur-libraire-éditeur, 1847), article « Testa-d'ase ».

ところで、フランス語にも *tête-d'âne* という表現があり、『19世紀ラルース』によれば、やはり頭でつかちという特徴からカジカを呼ぶのに用いられる、とされている。オタマジヤクシとカジカと、対象は違っても、体の格好からロバへの連想が働くのは、南北フランスに共通しているのである。

ただ、アヤメの花にまでロバの姿を重ねたのは、どうやら南仏だけだったらしい。それはそれで、プロヴァンス語のユニークさとして十分評価されるものであるが、同じロマン諸語のひとつで、かなりの共通性を持つフランス語に翻訳する際、同じ表現がすでに別の意味を与えられている場合はいささか厄介な誤解をも招きかねないのもまた事実である。

幼い頃、美しい花に魅せられて、夢中で手を差し伸べた日の懐かしい思い出を語るのに、その花の名を直訳してカジカに化けさせてしまつては困る。プロヴァンスの民衆を主な読者に想定した『年鑑』においてならば、「ロバノクビ」の名もよいが、仏訳を添えて、より広い読者層に訴えようとするには、この名は少し都合が悪い。ミストラルが最終的に「ロバノクビ」という名を捨て、無難に「アヤメ」の名を採ったのには、このような思惑が働いていたのではないかと推測される<sup>46</sup>。ただし、無難にとはいっても、ミストラルが仏訳で用いた *glais* という語は、例えば *iris* や *glaiëul* のような語と比べるとやや古風な語であり、*glaujo* というプロヴァンス語の単語に対して慎重に選ばれたフランス語であるのは確かである。

こうして、この短編は「アヤメの花」の話として知られるようになったが、1906年に対訳付きで『思い出』に収録される以前から名篇の呼び声が高く、原題の「ロバノクビ」のままでもフランス語に訳され、親しまれていたらしい。例えば1903年に出版されたミュゼオン・アルラテンを紹介したある書物は、展示品の一つであるミストラルの幼年時代の衣服にまつわるエピソードとして、これは「プロヴァンス文学の傑作の一つ」だという前置を添えた「ロバノクビ」の仏訳を掲げている<sup>47</sup>。

<sup>46</sup> なお『思い出』のフランス語版が、出版に先立って『政治・文学年鑑』誌に連載されたことはすでに述べたが、「アヤメの花」のエピソードはこの雑誌には掲載されていない。杉富士雄によれば、これは編集者側が「プロヴァンスのひなびた農民生活や文学復興運動のように、地方色濃厚な」箇所を、著者ミストラルに無断で削除した例の1つで、ミストラルの抗議にも拘らず、こうした検閲は以後も繰り返されたという。詳しくは、杉『『青春の思い出』の制作過程について』、『ミストラル「青春の思い出」とその研究』、福武書店、1984年、593-595頁を参照。

<sup>47</sup> Jeanne de Flandreysy, *La Vénus d'Arles et le Museon Arlaten*, préface par Frédéric Mistral, Paris, Alphonse Lemerre Libraire-éditeur, 1903, p. 67-73. ちなみに、ミストラルの『思い出』が『政治・文学年鑑』誌に掲載されることになったのは、この本の著者フランドレイ

ミストラルは『年鑑』に発表した作品に加筆修正を施すことがよくあり、例えば森鷗外訳で日本にも伝えられた「ナルボンヌの蛙」などは結末部分が大きく変更された<sup>48</sup>。「ロバノクビ」の場合は、物語の筋書には手を加えられていないが、中心的な役割を果たす花の名が地方特有の個性的な呼び名から、より一般的な名称へと変えられたことで、物語全体の印象にかなりの相違が生れている。そして、鷗外の「蛙」がドイツ紙を経由することで、『思い出』以前の『年鑑』版に近いものとなったのと同様、水野訳「驢馬の首」も、仏語教科書を経由することで、現在広く知られている『思い出』の版とは異なる内容を伝えることになったのである。

ただ、水野訳の底本と推定されるミロノーの読本は、すでに指摘した通り、原典としてプロン＝ヌリー社版『思い出』を指示しており、それにも拘らず内容が『年鑑』版になっているのは奇妙な話である。これは、『年鑑』版に忠実な翻訳のほうが、『思い出』の決定版よりも地方色が豊かでおもしろい、という編者ミロノーの判断にでもよるのだろうか。そして結果的にはこのミロノーの選択が、日本語訳者の水野にもミストラルの短編への興味を持たせ、多くのテキストの中からこの作品を選択する契機を与えたようにも思われる。それというのも水野が、ミロノーの読本では「アヤメ」とされていた題名までも「驢馬の首」に変えて、訳語をほぼ統一しているからである。

以上、水野葉舟が手掛けたミストラル作品の翻訳、「思ひ出」「太陽をほめる歌」「驢馬の首」について、特に現行版との差が大きい「驢馬の首」を中心に紹介をしてきた。これら3編はやがて水野編・訳の『フランスの読本』（春陽堂、1936年）という文庫本に収録されるが、大正後期から昭和初期の子供達が、仏文学者でも必ずしも目を通すとは限らない近代プロヴァンス語作家の作品を、小品とはいえ、場合によっては3つまとめて読むことができたとは、驚くべきことである。

しかし、これは実は本国フランスでのミストラル受容のあり方を忠実に反映した現象であった。代表作の『ミレイユ』は別格として、ミストラルの作品中、最も広く親しまれてきたのは、散文で書かれた自伝的作品『私の生立ち。思い出と物語』である。なかでも、詩人が幼少期の思い出をみずみずしい筆致で描き出した冒頭の数章は、格好の子供向け読物として、しばしばフランス語の教科書にも取り上げられてきた。

---

ジーの仲立ちによる。

<sup>48</sup> この問題については次の論考が詳しい。畠中敏郎『「蛙」考』、『比較文学の小道』、畠中敏郎先生論集刊行会（大阪外国語大学フランス語会内）、1973年、13-37頁。



ミストラルが詩作品に添えた仏訳は、往々にして極端な逐語訳で、原文との質の差が大きいとされるが、散文である『思い出』の訳文はさほど違和感を覚えさせない。よほど注意深い読者でない限り、それがもともとプロヴァンス語で書かれていたことなど気付かないだろう。そういう意味では、ミロノーの読本が、「アヤメの花」のエピソードを、フランス語にはないアヤメの異称を用いて、奇妙な引っ掛かりを感じさせる『年鑑』版に近い形で収録しているのは、意図的な操作かどうかはともかく、なかなか興味深いことと言える。

大正時代の日本の小学生にしても、「アヤメの花」よりも、「驢馬の首」という一見とても花の名とは思われない呼び名が使われていた方が、フランス（あるいはプロヴァンス）とは、なんと変わった土地なのか、と強い印象を受けたのではなかろうか。おそらく翻訳者の水野は素直に底本に従っただけなのだろうが、「驢馬の首」には、ミストラル本人さえ後には書き換えてしまったプロヴァンス語独特の表現が伝わっており、その意味で、フランス語教科書を経由した重訳でありながら、プロヴァンス語という言語の発想のおもしろさを保った貴重な作品となっているのである。

## 結び

1915年に濱田青陵が「マガリの歌」を翻訳してから、数年間にわたって途絶えていた近代南仏文学紹介は、1921年、仏文学者・吉江喬松の「ミストラルの家」と題するマイヤーズ訪問記の発表によって新たな展開を見せるようになった。本稿では、この1920年代における南仏文学紹介の発展の様子を、当時吉江が参加していた「農民文芸会」の周辺の動きに焦点を絞ってたどってきた。

吉江が「ミストラルの家」、次いで1923年の「南國」でフェリブリージュを取り上げた後、1925年には吉江の同僚の仏文学者で「農民文芸会」の同志でもあった椎名其二が、ファールとミストラルの生を対比しつつ描いたルグロの『ファール伝』を訳出し、翌年には「農民文芸会」の中心であった作家・犬田卯が「野の詩人ミストラル」と題する文章を発表。そして、こうした動きに寄り添うように、1921年と1923年には、吉江の友人の作家・水野葉舟によるミストラルの小品3編の翻訳が、子供向けの読物として世に送られている。なお、本文中では触れなかったが、水野も少なくとも一時期は「農民文芸会」に参加しており、彼の翻訳に椎名が目を通すことなどもあったよ

うである<sup>49</sup>。

このように大正後期の 1920 年代には、吉江を中心として相互に関わりを持つ文学者のサークルの中で、あるいは正面から、あるいは側面から、ミストラルへの接近の動きが見られた。彼等の仕事が互いに影響しあってなされたものなのか、それとも吉江から犬田へとつながる「農民文芸会」路線以外はそれぞれ別々に行われたものなのか、それを見極めるのは難しい。しかし、互いに無関係になされた仕事だとすれば、これらの文学者達の趣味や性向が基本的に似通っていたということで、それはそれで興味深い現象と見ることができよう。

なお、大正後期におけるこれらの近代プロヴァンス文学紹介と、それ以前の紹介との違いは、この時期の紹介者たちが参考にした資料がほぼ完全にフランス語の文献となっている点にある。犬田はラマルティーヌの「文学講話」を、椎名はファーブルの伝記作者ルグロの著作を、そして水野はフランス語の読本をそれぞれ使用している。フランス語の文献を利用することは、必ずしも伝えられる知識の正確さを保証するものではなかったが、それでも英語やドイツ語の文献を使っていた大正初期以前と比べれば、相当に時代が進んだ証であったことは事実である。

やがて昭和に入ると、フランス語を介したアプローチが更に増え、例えば、象徴派の詩人マラルメと近代プロヴァンス語詩人達の交流が注目されるようになったり、また「詩人ミストラル」の一編を含むドーデの『風車小屋便り』の全訳が行われたりして、ミストラルらプロヴァンスの詩人達の名は日本の読書人に親しいものとなっていくのであるが、その時代の近代プロヴァンス文学紹介については、別稿で論じることにした。

---

<sup>49</sup> 蟻川、前掲書、202 頁。